

第5章

参加者の声

阿部 彩織

日米学生会議での日々は、未知の刺激にあふれていた。留学等の経験がない私にとって、アメデリ達は人生初の外国人の友達となった。始めは彼らの話す英語は半分程しか理解できず、焦りともどかしい思いばかりが募った。彼らのことを知りたい一心でしばらくは全身を耳にすることに徹し、会議も中盤にさしかかったころ、やっと議論に交われるようになった。そしてファイナルフォーラムの前日、不安になっていた私を励まし、真夜中に発表の練習に付き合ってくれたアメデリたち。根拠のない自信のようなものに後押しされて上った演台では、10人で作り上げた分科会のcontextのなかに見出した自分の立ち位置から、4ヶ月の総まとめができたように思う。

アメリカ側の視点が加わることで、global contextのなかの日本をとらえ、新たな面を発見することができた。折に触れて感じた日本の人々のあたたかさや、清水の舞台から眺める京の街並みの美しさ、そして日常の東京の風景でさえ、アメデリに紹介しようと意気込む私の目には、いつも以上に活気のある別の街のように映った。隣にはいつも、親身に相談できる仲間、気後れすることなしに夢を語り合える仲間がいて、不安は次のステップへの原動力へ、漠然と思い描いていた夢は自分の将来像へと変えていくことができた。

日米学生会議を終えたいま、自分自身が大きく変わったという印象までは持ち切れずにいる。日米学生会議での一瞬一瞬において全力投球できたかと問いを立てると、後悔すら残るところだ。しかしこの1カ月間、70人のJASCer達からたくさん刺激を受けながら、新たな一日一日を積み重ねてきた。8月21日、日米学生会議での日々は終わってしまったが、私の人生にとって、それは始まりの日であったかもしれない。この経験をどのように活かしていくか模索を続けることで、日米学生会議を真の“Life changing experience”へと近づけていきたいと思う。

最後に、JASCerのみんなと、震災後様々な活動の自粛が相次ぐなか日米学生会議を支えて下さった全ての方々へ心より感謝したい。

有川 慧

「たった約1ヶ月の学生会議で、何ができるのか。」これは、第62回日米学生会議に参加してから、常に私に付き纏っていた疑問である。実行委員として会議の運営側に回り、さらに東日本大震災の影響を受け、多大な費用を掛けて例年同様に会議を開催することの意義について何度も考えさせられた。

第63回日米学生会議における「make a difference」という言葉は、会議での参加者内外の交流が互いの見解に変化を与え、その一つ一つの積み重ねが人々の価値観に共鳴した時に、世界に変化が生まれることを意味している。本会議では、約70名の思想も価値観も異なる学生が一つの場所に集い、互いのアイデアを衝突させ、悩み、葛藤し、彼らなりの結論を導いて行く。普通に過ごしていれば出会うこともないし、話すこともない学生と約1ヶ月間共同生活を行い、今まで議論し尽くされた“ように見える”様々な問題について、もう一度身を寄せて考える。それが、今まで物事を選択的にしか見てこなかった自分自身のフィルターを取り外す機会になる。

私の分科会では、会議前の期待通りに一直線に事が運ばず、切歯扼腕した参加者が多かった。分科会全体で一つの成果を創出する時、全員の意見を反映させることは難しく、妥協は付き物である。嘗てから熱意を持って取組んでいたものが切り捨てられた時、それを受け止める覚悟があるか。全てを切り捨てるのではなく、新しい物事に真摯に取り組み、考え抜くガッツがあるか。本会議を通して、参加者は様々な困難に遭遇し、互いに支え合いながら、それらを乗り越えて成長していった。

一人一人の参加者にもたらされた変化が世界の変化の種となるよう、我々は会議後もまた、努力を惜しまず挑戦し続けていく必要があるだろう。

最後に、本会議開催に多大なるご協力を賜り、運営にご指導いただいた全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。

五十嵐 淳

東日本大震災後にも関わらず、社会問題について日米の学生と真剣に話し合う機会に僕は恵まることができました。日米学生会議関係各位に深く感謝しております。中身の濃い本会議の中でも、個人的に一番印象に残っているのが初の試みだった日中学生会議との議論です。グローバル化・ソフトパワー・安全保障・環境などについて、日米中の学生が語り合いました。中国の軍事力増強について透明性がないから、日本人は中国の覇権主義を恐れていると僕は主張しました。すると、中国人学生は、中国政府は今まで外国で戦争を行なったことがなく、「他の国」を侵略することありえないと。しかし、彼らの「他の国」の中に、台湾やチベットは入っていないではないかと自分とアメリカの学生は指摘をしました。中国の学生は、それらは中国に含まれていると頑なに主張しました。これぞ、歴史認識問題であり、いかに解決していくかを、僕は「歴史認識問題と国際関係」分科会にて、この1ヵ月間、考え抜きました。分科会として提案した解決の方向性として、独仏共同の歴史研究のように、日中韓でも共同で歴史研究をし、共同の歴史教科書を作り、教育を通して、人々の認識を正し、問題の解決を図るというものです。実はだいぶ民間ベースでは、こういった共同研究は進んでいるようです。後は、政府の決断のみです。国家はどこまで譲歩するのでしょうか。同じ国家でも、日本やアメリカは民主主義国家であり、右派や左派が同様に影響を及ぼしあうから、比較的譲歩しやすいです。一方、中国は権威主義国家のため、譲歩すると自らの正当性を否定しかねないから難しいです。そのため、同じ価値を共有する同盟国のそれぞれの若者が国際問題を解決する努力をするから、とりわけ日米学生会議が社会的に意義を持つのだと確信してい

ます。日米学生会議で議論したことを生かして、一端でもいいから担っていき、JASCerとしての責務を果たしていきたいです。

石川 陽平

日米学生会議が始まる前、私は日米学生会議をどのように位置づけるべきなのか迷っていた。始まる前考えた末に出した答えはあったものの、腑に落ちなかった。日米学生会議が創設されて以降日米関係が極度に不安定な時期においては学生会議としての意義は大きかったが、現在の状況で力を持っていない私たち学生にできることはあるのだろうかという、不安にも似た疑問を持っていた。しかし、アメデリとディスカッションを重ねたり自由時間に語り合ったりするうちにその疑問は次第になくなった。

まず、学生として会議を行う意義は本当に大きいと思えた。社会に出れば、どうしても自らの利権の主張が多くなってしまうが、私たちは国境を超えて相手の意見を積極的に聞き入れようとし、思いやり、尊重しあった。このことは学生が最もできる点だと感じた。

JASCerは真に相手を思いやる優しさで満ちていた。英語が苦手な人に対してはアメデリがこまめに解説をし、ジャパデリは日本の文化を紹介し、疲れた顔をしている人に対しては皆がAre you OK? と心配し声を掛け合った。お互いの肩をもみ合いながら労をねぎらう姿もよく見られた。1ヶ月という期間、苦楽を共にしたことで、家族と呼べるほどの関係が築かれた。71人という人数は世界から見ればちっぽけな人数かもしれないが、その交流の深さは日米や世界を繋ぐことができる深さだと確信した。

私自身、このような素晴らしい環境のなかでお互いの視点や夢の共有をした時間は大変貴重であった。医学部というクローズな世界に生きていた私に世界の広さや可能性を見せてくれた。各方面の世界の動きをデリの口から聞き、会議中各地で様々な体験したことで、大海原に押し放たれた

かの如く世界観を広げることができた。本会議終了後も、JASCer と講演を聞きに行くなどしている。

最後になりましたが、アラムナイの方々や協力していただいた方々のお力添えを本会議中ひしひしと感じました。心から感謝申し上げます。

石川 恵

「あなたの日米学生会議での役割はなんですか？」JASC に応募しようと思ったときから、私はこの問いの答えを探していた。本会議を通して私は具体的な二つの役割を見出すことができた。

ひとつは沖縄の学生と参加者をつなぐ役割である。私は第3サイトである沖縄県の大学からの唯一の参加者だった。時には沖縄出身ではない私にできることは何だろうかと思惑もあったが、沖縄のことをもっとよく知って考えて欲しいという強い気持ちから、沖縄の現状を学生の視点から参加者に伝え、県内学生と共に沖縄の将来について考えるという役割を担うことができた。

もうひとつは自分の意見を伝えるという役割である。心配していた英語は本会議中も大きな悩みとなった。さらに私が所属した分科会が選んだLGBTというトピックに関しては講演会に行った経験はあるものの、自分自身の問題として考えることを避けてきてしまっていた。分科会での議論そのものが新しい知識であり貴重な経験だった。そのような中で英語での議論を理解して自分の意見を言うことはとても難しかった。しかし最後には、分科会の仲間に助けられながら、なんとか自分の意見を伝えることができた。そこで私が感じたのは、どんな困難があろうとも自分の意見を伝えることがひとりの参加者として非常に重要な役割であるということだ。今、英語で悩んでいる人がいたら迷わず応募して欲しい。大切なのは「伝えたいこと」があるかどうかだから。

JASC に応募したとき、私はなにか「生きている」実感を得られることを求めていた。JASC の毎日はまさに「生きている」、そんな実感と役

割をくれた。そして70人の大切な仲間と多くの貴重な経験をくれた。このような機会を下さった全ての関係者の方々、そして第63回の皆に本当に感謝している。

この経験は次へ進むステップだと思う。1人のJASCerとして、また新たな役割を果たすべく、これからも一歩ずつ確実に進み続けたい。

伊藤 あゆみ

日米学生会議。この名前をみて、背伸びした学生が偉そうに社会問題について議論する場をイメージする方もいるかもしれない。実は私も最初はそう思っていたが、それは完全に間違っていた。

日米学生会議では、様々なバックグラウンドをもった学生全員が納得するプレゼンテーション(または活動)をつくることが求められる。その際には、わからないことはわからないと問い続け、相手の意見を丁寧に聞き、なぜそう考えたかというイメージを共有し、理解しようとするのが不可欠であった。表面的に意見を認識するのではなく、きちんと相手の意見を理解しようすることは、言語の問題もあり簡単なことではない。しかし、そのプロセスを丹念に行うことで皆が同じ議論の土俵にたつことができ、問題の複雑性を発見し、新たな解決の糸口を見いだすことができた。そのプロセスは、まさに、テーマ「Qquestion, Engage, Build: Collaborative Effort to Make a Difference」そのものであり、本当に刺激的で楽しかった。身の丈に合わないような宙に浮いた議論をしていては、プレゼンテーションは完成しない。日米学生会議は、自分たちの視点や身近な疑問から問題について話し合い、複雑性を理解しようとする試みであった。

今回の日米学生会議で、私は相手の声を聞き、心から理解することの重要性を学んだ。特に沖縄サイトで歴史認識問題や基地問題に取り組んだ際には、各アクターが自分の意見や思いの主張に終始する、または立場上の制約からそうせざるを得ないあまり、相手と十分な対話をすることができ

ず、解決への道が閉ざされてしまっている様子を垣間見た。

日米学生会議の意義は、このような問題において、大人よりも自由な立場から相手を理解し、解決策を提供し、新たな視点から問題提起する機会を提供することにある。経験は社会で活躍する大人には劣るかもしれない。しかし、社会に出る前に学生がこのような機会をもつことは、はじめは小さくとも、いずれ確実に社会全体の未来に良い影響を与えるものとなると考える。

伊藤 実梨

事前活動から本会議まで JASC での 4 カ月。私にとって JASC とは何だったのか。完全な答えは未だ見つけられないが少なくとも言えるのは、世の中の問題、参加者をはじめとする他者、そして自分自身と真摯に「向き合う」4 カ月であったことだ。

まず分科会を通し安全保障と向き合った。それまでただ机上の学問分野として触れていた安全保障を現実の問題として目の当たりにし多くの新たな視点に出会いながら深く学び議論した。多様な分科会メンバーと共に、時に困難に直面しながらも現状を見つめることを止めず熱く真剣に議論した経験は何にも代えがたい。

また 70 人の参加者と共に語り向き合った。非現実とも言える日々が続き真剣な議論から些細な会話まで全てが刺激的で楽しかった。彼らは一生の友人かつ切磋琢磨出来るライバルであり、今後私に彼らの挑戦や言葉に関接的直接的に励まされ背中を押されるだろう。

そして彼らの多様性や個性に囲まれ組織の一員としての自分という意識が強まると同時に、様々な経験や挑戦を通し自分の弱みや強みを知り「分科会、JASC、あるいは社会における自分の役割や貢献出来ることとは何か」を大いに考えさせられ、自分自身と真剣に向き合うきっかけを得た。この問いへの答えは JASC の経験を礎に今後も探し続けていきたい。

心から辛かった時間や楽しかった時間全てを含め数え切れない程の素晴らしい経験をした。そして JASC で過ごした 4 カ月を経て少し「成長した」と言える自分と、その一方で「これからが勝負だ」と更なる挑戦へ立ち向わずにいられない自分が、今ここにいる。かけがえのない 4 カ月を可能にして下さった全ての方に心から感謝を伝えたい。本当にありがとうございました。

井上 聡美

昨年、第 62 回日米学生会議の報告書に載せた参加者の声を振り返る。そこで記した私の気づきは、自分を見つめるためにはまず他者を見つめる必要がある、ということだった。JASC という場は一カ月をかけて参加者同士が互いを見つめあい学びあう場であるということ、そしてそういった JASC の場ではありのままの自分自身でいることよりも、自分自身にできる役割を探し、そのポジションに自分を当てはめることの方が重要であるということ学んだ。もちろんありのままの自分にできることはたくさんあるが、「適材適所」という言葉が示すようにその中から自分に一番合うポジションかつ JASC に一番必要なポジションを見つけ、その自分を演じることで多くの他の参加者に影響を与えることができる、そう感じた。

それから一年、日米学生会議という団体に必要な役割のうち、私が担うことができるのはどのような役割なのか、そしてそれが他の参加者にどのような影響を与えられるのか考え続けた。そして日米学生会議に参加する他者という存在の目線を意識して私を演じる中で、さらにその私の中に私自身に対する目線があることに気がついた。つまり、他者を意識してはまった役割に居続けることは同時に私を見つめることでもあるということだ。私が本当にできることや私が本当はどんな存在でありたいと願っているのかという、非常に基本的な私自身への問いかけの答えが見えるようになったのである。

第 62 回日米学生会議は私にとって自分を通し

て他者を見つめる場であった。そして第63回日米学生会議は他者を通して自分を見つめる場へと変化した。そして今、その視線は私自身へ戻ってきた。これからも私の私自身との付き合いは続いていく。むしろやっとスタート地点にたった気さえしている。JASCで得た私自身への視点と共に、私は私自身との人生の航海を続けていきたい。

上江洲 仁子

本当にあっという間だった。私にとって、JASCとは何だったのだろうか。一言で言うと、私らしさに気づかせてくれた。大学に入り、その生活に慣れることで精一杯で、自分がやりたいことや本気になれる場所が見つからずにいた。そんな中、私はJASCと運命の出会いをした。それから、奇跡的に合格を果たし、待ちに待った春合宿の日が来た。初めて会った仲間、一人ひとりが素敵で、心から尊敬した。その一方で、私は緊張のあまり、自分を出せずにいた。そんな心配の中、しだいに仲良くなるにつれて、自然と自分を出せるようになった。いよいよ本会議。何よりも英語を使うのが怖かった。アメデリに始めて会った時、緊張のあまり「Hello」さえ言えなかった。そしてRTでは、議論に追いつけずに悩んでいた。これは私だけの問題、熱い議論を続けさせることが、グループへの最大の貢献であると思っていた。しかしそれはただ、逃げていただけであった。悩みが次の失敗を招き、度重なる失敗をどうにかしたくて、その思いが強くなりすぎて、体調をくずすこともあった。JASCに貢献できないだけでなく、迷惑をかけてしまう。本当に私はここにいていいのだろうか。そんな時、「君がいないとJASCは(私も)あかん。」というメールが届いた。それで私は目が覚めた。私を必要とする人がいる。諦めなければ、何か変えられる。それから、自分なりに問題解決に向けて、全力で頑張った。あの時のメールのように、何気ない一言が私を助けてくれた。そして諦めずに頑張ったことで、私だけでなく、周りも変わった。自分の実力のなさを認めること

と諦めないことはとても苦しかった。でもどんなに大きい壁でも、諦めず立ち向かえば、仲間と一緒に乗り越えられることができるということを知った。JASCで学んだ。JASCに携わった一人一人に心から感謝したい。

この経験を生かし、仲間を大切に、どんなことがあっても諦めず、私なりに、少しでも誰かに勇気を与えられる人になりたい。

奥谷 聡子

私は去る一年間、実行委員として夏の本会議に向けて仕事に励んできました。本会議が始まるまでの道程は長いようで短く、それに比べると夏の約1ヶ月は夢のように瞬く間に過ぎてしまったように感じます。夢から覚めた今、第63回日米学生会議を無事終えることができた安心感と同時に、この一年間の思い出が次々と脳裏を過り、毎週の定例会や二週間に一度のアメリカ側実行委員会とのSkypeミーティングなど全てが恋しく、現実に戻されるような少し切ない思いでいます。今年度は、選考期間中に東日本大震災が発生し、会議開催も一時危ぶまれましたが、余震が続く中で選考試験を行いました。本会議初日にはアメリカ側代表団は豪雨のためバスが塞ぎ止められるなど、数々の天災を乗り越えて会議はようやく開幕しました。参加者としての会議と、実行委員として臨んだ本年度会議は全く異なる経験でした。各サイトのプログラムは全て、意図的に実行委員により組み込まれています。其々のプログラム後に参加者から良いフィードバックを得られた時や、彼らの楽しんでいる姿を見た時に実行委員として一番の嬉しさを感じました。分科会でも同様に、活発に議論が交わされている時や価値観、意見の違いに悩み、もがき、一つずつ山を越えて変化していくグループのメンバーを見た時はとても嬉しかったです。この反面、実行委員としての挑戦も多々ありました。各サイトでは、水不足、熱中症、食文化の違いなど様々な想定外の問題が発生し、その都度、冷静且つ迅速な対応を求めら

れました。71名という大規模な集団を学生が全て運営することには重大な責任が伴います。しかし、そこには主催団体、財団、企業、個人の手厚い支援があることを常に認識させられました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

最後に、今回出逢った70名の国境を越えた友人、特に15名の実行委員ファミリーに向けて「ありがとう」の言葉を贈りたいと思います。

尾崎 裕哉

別れの日一人ひとりの目から涙がこぼれるのを見て、日米学生会議の成功を実感した。私が日米学生会議で心から達成したかったものが分かった瞬間だった。不安と期待が渦巻く心を抱えながら過ごした実行委員としての一年間はこの瞬間の為にあったのだと言える。

「知ることから創ることへ」という理念を掲げ活動してきたこの一年間、私は様々なことを学べた。私にとってこの理念の本質とは「創ることで創ることを知る」ことにある。理念の決定、広報、財務活動、選考、コンテンツ作成など、日米学生会議の一つ一つのピースを合わせて行く中で改めて「共に創る」ことを知った。それは、時には辛いプロセスだった。しかし、辛いことを感じた分だけ楽しさが生まれ、仲間と過ごした一瞬一瞬がより深く心に刻まれた。

なんといっても、本年度の会議には特別な意味がある。東日本大震災によって一度は開催が危ぶまれたものの、大勢の方々の支援や実行委員の努力により本年度も無事開催することができたことである。その想いを参加者は理解してくれたと思う。本年度だからこそ開催するべきJASCを開催し、今年だから実現できた数々のイベントが各参加者にLife Changing Experienceを届けることができたと自負している。71人分の世界を変えることが出来ただろう。

この夏を共に過ごした仲間たちは日米学生会議という舞台の上での自分達に出来ることを探し、それぞれが自分らしさを精一杯演じてくれた。そ

して今、日米学生会議を糧に旅立とうとするもの、日米学生会議の伝統を引き継ぐもの、それぞれが選んだ道を歩もうとしている。日米学生会議は将来にどのような影響をもたらせるのかは正直分からない。でも、間違いなく二年前に日米学生会議と出会っていなければ、今の私はいなかったと思う。そして、私たちを支えて下さった方々の想いを胸に、この先出会う全ての人達に日米学生会議で得た学びを伝えて行きたい。改めて日米学生会議に関わる全ての方々に感謝の意を表したい。

小田 康弘

私が日米学生会議に出会ったのは高校二年生の夏でした。当時広島学院に通っていた私は、第59回会議広島サイトに現地高校生として一部参加させていただいたのです。生き生きとした大学生の先輩方、活気に満ちた議論。その空間に高校生の私は大いに刺激され、「大学生になったら必ず日米学生会議に応募したい」という気持ちを抱くに至りました。その後大学に入学し、三年生になり、4年越しに再びいただいた日米学生会議とのご縁が今年参加した第63回会議でした。

会議全体を振り返ると、夏の本会議に先立って行った広島研修と防衛大学校研修が鮮やかな思い出として蘇ります。広島研修は、仲間と一緒にどうすれば広島の方がよりよく伝わる研修を作れるかを考えた、熱い準備期間がありました。防衛大学校研修は、日本に自分と同じ年齢の「軍人」がいることを知って「安全が保障されるということ」を根本から考え直す機会となりました。共にかけがえのない経験です。

全ての事前学習を踏まえ、いよいよだと臨んだ夏の本会議はいわば「本番」です。日本人とアメリカ人総勢71名の中、持てる全ての力を注ぎました。新潟、京都/滋賀、沖縄、東京の各地各場所に参加した一つ一つのプログラム。実現するために、どれほど多くの方がご支援下さったことか。どのプログラムに参加した時も常に感じた感謝の気持ちは今でも言葉で表し切れません。特に本年

度会議は東日本大震災直後の開催であり、経済的にもその他の面でも皆様大変な中で頂いた重みのあるご支援だと感じています。

私は日米学生会議を通して、今後直近の目標を「自分が人生を通して、社会において社会のためにしたいことは何か、具体的に考える」と据えました。日米学生会議をご支援下さった方々の私たちへの期待を忘れず、応援して良かったと思って頂けるよう努めます。

最後に改めて、ご支援を賜った皆様、全ての会議参加者を含め、日米学生会議に関わって下さった全ての方々に御礼申し上げ、私の感想とさせていただきます。

川邊 拓也

山のように積まれた、思い出の写真を見ながら、「参加者の声」を書いている。静止画であるにも関わらず、私にはそれらが動いて見える。皆の笑い声、考え抜く表情、癖や仕草、全てを鮮明に思い出出すことが出来る。それほどこの一夏の経験は、私の胸に深く、色濃く刻みついている。

「何か1つのことを本気でやり切ったと言える自信が欲しい。」私がJASCに応募した動機である。中学、高校時代は柔道に全身全霊で打ち込んできた。しかし、私が大学で「やり切った」と言えるものは何一つ無かった。原因は明白であった。自分の興味に基づく、ありとあらゆる活動に手を出しすぎたためだ。全て、私がやりたい活動であったにも関わらず、タスクが余りにも多すぎたために、いつしかそれらは私の中で“義務化”されていた。JASCを“義務”として終わらせたくなかった私は、直前合宿のリフレクションで「1ヶ月全てをJASCのみに捧げ、全力で楽しむ」と誓った。しかし、JASCを「楽しむ」ことと「やり切る」ことを両立させることは予想以上に困難であった。語学堪能、知的好奇心旺盛、才能に満ち溢れ、尚且つ努力することを惜しまない、まさに「自強不息」という言葉が当てはまるJASCerの中で、自分の役割を見出せず、苦しんだ時期が多かった。

JASCでの存在意義を、自問自答し続けた末に気付いたことは、自分の役割が各要所(全体内、RT内、新実行委員内)で変化していることだ。1つの役割に固執せず、必要とされていることに柔軟に対応することもまた、重要な役割であると知った。

本会議を終えた今、「JASCに1ヶ月を捧げ、本当に良かった」と心から言える。第63回日米学生会議に携わり、私を支えて下さった全ての方々に感謝の意を示したい。最後に、私たちの旅は終わった訳ではない。この4ヶ月間はあくまで未来へのきっかけに過ぎないのだ。私たちの旅はこれからも続く。

河村 統治郎

私が、日米学生会議に参加して一番感じたのは、日米学生会議は自分自身と向き合う場であったということです。本会議は、約1ヶ月寝食を共にして、朝から夜中まで何度も何度もディスカッションを繰り返し、相手と真剣に向き合う場でした。その中で、私は言葉の壁、文化の壁を感じ、自分自身と常に向き合っていたと思います。

語学面に関しては、曲がりなりにも出来ると思っていた英会話が上手くできませんでした。少しでも相手の話が早くなると付いていけない、参考資料も難しくて読めないという挫折を味わいました。また、文化の面ではディスカッションに取り組む姿勢の違いから、同じ分科会のメンバーと衝突するといった場面もありました。それだけではありません。ディスカッションを通じて、自分の考えを常に持つこと、自分の考えをまとめること、立場に場所に関係なく自信を持って発言することができていない自分にも気づきました。これらの思いが募り、悔しくて泣くこともありました。

しかし、ただ落ち込むだけでなく、そのような状況でも分科会に貢献できるように自分には何が出来るのかも考え、実践することができたと思います。友人たちの手を借りながら、議論の中で分からないところは分かるまで説明をしてもらう、

自分の意見を相手にしっかりと主張する。ファイナルフォーラムに向けて、議論の流れを建設的な方向に持っていく。最後の最後まで自分と向き合い、議論に参加し続けることが出来たのではないかと考えています。

最後に、参加者たちは日本側・アメリカ側に関係なく、本当に全員が素晴らしいです。辛いことも多くありましたが、彼らと1ヶ月を過ごし、友情・ディスカッションを築き上げ、ともに感動しました。最終日に、アメリカ人青年達が空港に向かうバスを見送る際に止まらなかった涙は、この1ヶ月の全てを表していたと思います。参加できて、本当に良かったと思います。

北林 未菜

私は、この会議に参加した71人の中で最年少であった。18歳、高校卒業して4ヶ月、大学生生活を始めてから3ヶ月弱の時点でJASCに参加した。春合宿から本会議までの4ヶ月間、自分で変化が起きたのか、終わってからも良く分からなかった。それは、終盤のJASCメールやJASCerと話していたときに、「未菜は、本当に成長して、変わったね。」と言われて初めて意識し始めたことだからだ。まだ自分でも整理できていない部分は多い。

大学二年、大学三年、大学四年、さらには大学院に通っている参加者もいる中で高校を卒業して間もない自分の役割とは何なのか、とずっと考えていた。他の参加者と比べて、若い上にエネルギーに満ちている部分があれば、同時に幼く感じられているのではないかなどの不安もあった。しかし、自分は、たった4ヶ月でいきなり大学院生並みの知識をつけられるわけでもないし、考え方も急に変わることはない。考え方については、今自分が感じていること、知っていること、それらを応用して分科会活動、他の参加者と接すればよいのではないかと思った。もちろん、自分の中で他の人の意見を聞いているうちに、このような考え方もあるんだ、などの新たな発見もあっておもしろ

かった。日米学生会議に大学生生活の早い時期に参加できて本当にかげがえのない経験をしたと考えている。まだ、自分の中で明確に表すことはできないが、確実に参加する前と後では変わっている。これから大学四年間を歩む上で、どういう風に過ごす・どういう風な人になりたいなどを考える上での重要な基盤となった。

栗原 隆太郎

参加者、実行委員として約一年半に亘って関わってきたJASCとは何だったのだろうか。

この問いを「参加者の声」を書くにあたって自身に問いかけてみたものの、一年半という期間はあまりに長く濃く、幾度試みても纏まらず非常にもどかしい思いを感じた。しかし、そのもどかしさは、JASCがこの約一年半、自分が意識している以上に私の生活の根幹を成すものであったことを教えてくれた。つまり、常に自分の生活の一部として存在していたものを客観視し、「JASCとは何だったのか」という大きな視点が必要な問いに答えるには、私にはもう少し時間と成長が必要なのだ。

上記のような大きな問いには今はまだ答えられないが、JASCが自分にもたらしてくれたものは現時点で強く実感している。

JASCを通して、私は日米のことや他人のことより何より、自分と向き合い、自分を知った。JASCの実行委員としての仕事や参加者との交流を通して、自分の弱さに気付くことが出来た。そしてそんな弱い存在の自分は数多くの人に助けられて生きているということ、単なる cliché としてでは無く、心から理解することが出来た。

この二つの「気付き」を与えてくれたこと。それは今後の人生を送る上で私の進む道程を大きく変化させることを確信している。そのような変化を多くの参加者に起こすエネルギーを持ったこのJASCという会議の何たるかを理解するには、まだまだ長い時間がかかりそうである。未来のある一点でJASCを振り返った時に、その問いへの答

えを再考することが楽しみであり、そこでしっかりとした答えを出すためにも私自身成長し続けた。その決意の思いと、客観視できない程 JASC に夢中にさせてくれた友人達、そして会議の開催を可能にして下さった全ての人々に感謝の意を表し私の「参加者の声」としたい。本当にどうもありがとうございました。

小池 あずさ

「第 63 回日米学生会議、どうだった？」—8 月 21 日、約 1 ヶ月に亘る会議の幕が降りてから、何度となく聞かれる質問である。シンプルに感想を言うならば、楽しかった、つらかった、勉強になった—こんな言葉を並べればいいのかもわからない。しかし、私には 1 ヶ月の JASC 本会議、5 月の春合宿から始まる 4 ヶ月の JASC 体験を、どのような言葉を用いれば形容できるのかわからないし、もしかしたらそれを形容できる言葉などないのかもしれない。ただ、一つ確かなのは、私にとっての JASC は、2011 年の 8 月 21 日に『終了』したのではなく、新しい『スタート』であったということだ。その『スタート』をきらせてくれたのは JASC を通して得た『高め合える仲間』と『支え合える仲間』である。常に挑戦し、質問を投げ、最高を求め苦しみ、泣きながら心を打ち明け、真剣に相手を理解して支え合った大切な仲間— JASC が私にくれたものは数えきれないし、今後の人生で段々と気づくものは沢山あるだろう。けれど、これからの私の人生を通して私の芯にあるのは JASCer としての誇りと、今も未来もずっと全力で走り続けるのであろう、高め合い、支え合える『仲間』だと思う。ただひとつ言っておかなければいけないのは、JASC で私が作り上げたものは『完璧ではなかった』ということである。JASC 本会議を終えた私の前には巨大な課題の山である。まだ、なにも終わってはいないのだ。JASC においてはしばしば、『Life Changing Experience』という言葉が使われる。今ならこれが、JASC 自体が人生を変えてくれる

のではなく、JASC において気づいた自分の不完全さや悔しさ、そして今も走り続ける仲間になれないという意地が今後の人生を通して自分を駆り立て続けるからこそ、自分の手で人生を変えていくのだということがわかる。まだ何も終わってはいない。すべては始まったばかりだ。『Once a JASCer, Forever a JASCer.』。私にこのような貴重な機会を与えてくださった皆様、心からお礼を申し上げます。

小林 歩

自分が届けたいのはどんな「声」だろうか？「誰」に届けたいのだろうか？あらためて考えると、なかなか難しい。濃密だった一カ月、それを言葉で説明するのも難しい。友達に「お帰り。どうだった一ヶ月？」と聞かれた時でさえ、「伝えたい」という気持ちと、「簡単に分かった気になるなよな」という気持ちが交錯するのに・・・と、正直な戸惑いを吐露した勢いで、「正直な声」を書いてみる。

今、自分の頭の中を占めているのは、仲間のことだ。JASC 中、何度も、皆の英語、ユーモア、知識に、凄えと唸り、同時に、羨ましいと思った。でも実は、一番尊敬したのは、自分と同じくらい英語が出来なくて、自分よりも分科会の知識が少なかった、同じ分科会の梓だ。

京都での中間報告会。前日の深夜、梓とプレゼンの改善案を思いついて、当日の朝に他のメンバーに提案することにした。でも、当日の朝、自分は、担当の原稿が書き終わらず、提案することを忘れ、独りで作業に没頭していた。ふと気がつくと、梓がメンバーのところを周って、改善案を話してくれていた。その時、同じくらい余裕がないはずなのに、チームのために行動している梓と、自分のために行動している自分の差に、ガツンと頭を殴られた。

尊敬だけでなく、仲間ががっかりする場面もあった。首里城を訪れた際、大半の JASCer が展示そっちのけで記念写真ばかり撮っているよう

に見えた。内心、「写真撮りに来た訳じゃないでしょ。『沖縄の文化を知りたい』って口だけじゃん。」と思った。でも、いつもなら一人で醒めて、心の中にしまってしまう場面だったけど、今回は違った。その気持ちを伝えたらちゃんと受け止めてくれる仲間がいた。RTリーダーの隆太郎と話し合ってみて、その中で自分なりの解決策を見出すことができた。

終了後も、JASCer に対する 50% の尊敬と 30% のジェラシーと 20% の「こんなもんじゃないだろ」が、自分の原動力になっている。みんなありがとう。

櫻井 千浪

第 63 回日米学生会議を振り返って思うところは主に 2 つあります。英語と分科会についてです。私は、伝えたいことすべてをすぐに正しい英語に直せるほどの英語力はありません。本会議の最初の頃は緊張もあって、分科会の英語での議論についていけませんでした。自分の英語力のせいで分科会の議論を止めてしまうのが嫌で、C(Clarify: 簡単な英語表現に言い換えてほしい時のサイン)やT(Translate: 日本語で通訳してほしい時のサイン)を使うのをためらってしまい、今ではそれを後悔しています。議論を理解できなかった悔しさと、理解していれば出てきたかもしれない意見を出せなかった悔しさを感じています。しかし、本会議中盤からは、分科会の日本側参加者たちの励ましやアメリカ側参加者の優しい心遣いのお陰で、分からないときにはC(時々T)を使えるようになりました。そうすると自然と自分の意見も出てくるようになり、分科会に貢献できたと思います。この会議を通して、英語力も伸びましたし、英語が分からなくても質問して理解することが大切であることを学びました。これからもっと精進して英語力を伸ばします。

次に、分科会で学んだことです。それは、他人の意見を尊重し、一方で、自分の意見も述べて、分科会全体として高めあっていく姿勢が、グルー

プで実りある議論をするにはとても重要だということです。自分の意見を主張することに必死になるあまり自分と異なる意見を真剣に聞かないということは、意図しないうちに起こってしまいます。

しかし、自分がグループ内で一番素晴らしい意見を持っている保証などないですし、それまで気付かなかった大切な視点を他の人の意見から得ることができます。私の分科会のメンバーは、それぞれが素晴らしい意見を持っているのに加え、他の人の意見を聞き理解し尊重する姿勢を持っていました。その姿勢の大切さを実感できたことは、今後の私にとって大変良いことだったと思います。

佐々木 いくえ

今年三月、一次審査合格に喜んでいた日常生活のど真ん中を、大震災は急に襲ってきた。震災後は一日を無事に生きるのが必死で、まるで戦後のように自衛隊の配給に並ぶ日々だったが、全国・全世界から駆けつけてくれた人々の姿に、とても救われた。

開催地である新潟・京都/滋賀・沖縄・東京のどこを訪れても、「大震災復興のために何かしたい。」という声と、被災地の現状に胸を痛めてくださる多くの人々と出会った。特に新潟県山古志村を訪れた経験は印象深い。現在山古志村は、当時の状況・防災の重要性・自然災害からの復興を人々に伝えている。山古志村訪問はとても辛く感じる一方で、「いつか、自分の故郷も山古志村のように生活を取り戻せるのではないか。」と未来の姿を見せて頂いたようだった。

このように、支援して下さった方々に直接お礼を伝えられたことは、人を助けるのは優れた技術などではなく、他人が他人を思いやるその心であり、此度のような試練であっても、乗り越えるための鍵は人間の絆であると、強く信じてきた。

日米学生会議は未曾有の大震災の中、強い絆に守られ最後まで無事に終えることができた。この

意義は非常に大きいと石巻市から参加した者として感じている。日本には今も希望があること、災害は人々の生きようとする心まで奪うことはできないことを実証できたのではないかと思う。

日米学生会議参加にあたり、私は本当に多くの支援と、優しく心強い励ましを頂いた。日米の仲間に支えられながら、大震災から半年間という時期を、私は諦めずに希望をもって乗り越えることができた。日米学生会議を御支援して下さった皆様方に、皆様から助けて頂いたおかげで、立ち直ることができたことを心から感謝致します。

佐藤 安里紗

日米学生会議を終えた今、自分の気持ちを一言で言い表すことは到底できない。様々な感情が入り交じって、本会議終了後約一週間が経ったが、会議が行われた一ヶ月の出来事をまだすべて整理しきれていない。しかし文章にすることで会議全体を客観的に振り返ることができるだろう。

会議が始まる前、私は不安と緊張に押しつぶされそうだった。というのは5月の春合宿以降日本側でできる限りの準備はしてきたが、十分ではない、あるいはアメリカ側に受け入れられないのではないかという懸念があったからだ。また、日本側は英語面だけではなく内容面でもアメリカ側に劣るのではという心配があった。実際、会議を終えて、自分にとって問題は英語力よりも発想力や相手に自分の意見を分かってもらえるような表現力だった。私は9月からカナダに留学するが、表現力の強化は留学中の目標の一つになった。分科会では時折、相手の意見を理解するのも、相手に自分の意見を理解してもらうのも難しいと感じた。初めはお互いに理解できないことでストレスがたまり理由も分からなかったが、ある時相手の側に立って説明していないからだ気づいた。相手にどう理解して欲しいかではなく、どのように説明したら相手が理解してくれるかを考えるべきだったのだ。その後は、相手に分かってもらうために我慢強くなることができた。

また70人との一ヶ月に亘る共同生活は一日一日が大切で、かけがえのない思い出となった。会議前は一人でいる時間や睡眠時間が少なくなることが心配だったが、会議中はどんなに疲れていても、他の参加者と話す時間が何よりも貴重だと感じた。分科会外でもJASCerらしく時事問題、音楽、大学や文化の事など多くの話題について話し合うことができた。会議で過ごした一ヶ月は今までで一番充実した、決して忘れられないものとなった。会議は終わったがこれから自分が何をやるかが重要なので気持ちを新たにしていきたいと思う。

塩原 梓

春合宿の夜、一人ひとりJASCに対する目標を宣言した。私が言った言葉は、「何に対しても自信のない自分から抜け出したい」。

忘れもしないあの日、一通のメールを受け取って、私は第63回日米学生会議に参加できることを知った。楽しみや不安よりも、何かの間違いじゃないかという気持ちの方が強かった。

さて、あのメールを受け取ってから5ヶ月が過ぎようとしている今日。今だって自信なんて持てない自分がいて、私がメンバーとして選ばれたことが正解だったなんて胸を張って言えないわけだけれども。思考に何か変化が生まれていることは確かだ。

その変化の原因はJASCer一人ひとりとの出会い。彼らのいろいろな物事や自分の気持ちに対する姿勢を目の当たりにした本会議。思ったことを人に伝えて、その言葉に対する真剣な応答があって。そんな彼らのやりとりは、自分が今までどんなことから逃げてきたのかを気付かせてくれた。私だったら向き合いたくないと言って誤摩化して考えないようにして頭の隅に追いやってしまうような感情に対しても、理由を追求して、その理由が本当に妥当なものなのかを検証して。

何かを感じたときはその自分の感情や考えと真摯に向き合っていないといけなくて、そのような作業なしには、「なんとなく自信のない自分」

から抜け出すことはできない。そんなことを気付かせてくれたように思う。魅力的に感じる人は自分の考えをしっかりと持って、それを伝えることができる。一つひとつの言葉の重みが全然違う。見える風景の重みが違う。過ごす時間の重みが違う。そんな鮮やかな世界で生きてみたいと思った。

自信のなさの理由を、どうしても感じてしまう心と言葉のギャップの原因を、なんとなく掴めたのかもしれない、それを確かめるためにこれから頑張ろうと思わせてくれた。そのような機会を与えてくれた全ての人たちに対する感謝の気持ちで一杯です。

杉岡 昌太

日米学生会議を通して学んだことは社会に蔓延する様々な問題は単純なものではなく、実際に当事者の声を聞き、そして現場を見ることにより真に理解に近付けるということでした。アメリカ側と日本側の観点を総合することによって、日本の学生だけでは決して生まれえないような発想や、議論構築が生まれ、世界観がたった約一カ月という限られた期間の中で広がることを肌で感じさせてくれました。学生という位置づけを超え、社会、世界の一員だという意識の下集まった参加者全員が会議においての自分の役割を見つけており、それを実行し、お互いを感化していたと思います。私自身もこの会議を通して、様々な感情や論理、そして思考、価値観と触れ合うことで、これからの未来を見据える大きな先見性を得られたのではないかと自負しています。また、会議の本質として、この場で出会った参加者とは一カ月間ただ闇雲に時間を共有したというのではなく、未来永劫に繋がる絆を共に作り上げることに成功したと心の奥底から信じてことができます。この絆が今後の将来に最良の影響を大いに与えてくれると確信しており、そして私自身も彼等に良い影響を与えることとなると感じています。今年3月、東日本大震災の発生した日本においてこの会議を継続、実施したことはアメリカ側、日本側参加者

にとって以前の会議とは比較できないほど大きな意味を内包しており、それぞれの参加者が今後の課題を見つける機会を得ることができたと思います。この会議運営に協力して下さいました多くの関係者の方々にこの場を御借りして感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。人生においての転機を頂けたことに深く感謝し、これからも努力して参ります。

杉山 和

会議中はあまり意識に上ることがなかったが、海外の人々から見ればいまだに安心して日本に渡航することは難しいと思う。そんな中、日本開催の日米学生会議に参加してくれたアメデリ全員の勇気を心から尊敬する。

日米学生会議から学んだことは大きく二つの種類に分けられる。一つはプログラムを通しての知識の習得で、もう一つは他の JAScer との対話から得られたものである。原子力発電所の見学、米軍基地関連施設での説明など日米学生会議のプログラムはどれも普段は経験できない貴重なものばかりだったが、日米両国の参加者との交流はより貴重だったと思う。参加者とコミュニケーションを取るなかで、国によって違う点と変わらない点があることが分かった。言葉や表現方法、習慣が同じでないのは当然であり、会議中もお互いの中にある「違い」を感じるものがしばしばあった。しかし、アメデリも同じ人間であることを忘れないようにすれば、話を聞いて何を考えているのか理解できることを学んだ。また、一生懸命英語で話すのを親身になって聴いてくれるアメリカの友人も何人かできた。ジャパデリの友人も含め、かけがえの無い親友がすごく増えた。私は最初 hug をすることに慣れておらず、何のためにするのかもよく分からなかったが、抱擁したときに心臓の鼓動が伝わってきて同じ人間であることを実感し、安心したのを覚えている。

実行委員としてもう一年日米学生会議に関わる事が決まってから、自分にとって日米学生会議

がどんな存在なのか考えた。本会議前までは、大学外の活動に参加していることをステータスと考えていて自尊心を満たす存在であったが、今では居場所の一つになった。今楽しみにしているのは、これから共に実行委員として活動するメンバーの新たな側面を発見することと、多くの人々と新たに会うことである。

竹内 智洋

会議継承の意義や実行委員長としての役割をはじめ、この一年は葛藤に続く葛藤だった。実行委員という個性豊かなグループを束ねることもそうだが、東日本大震災が起きた年に大金をいただき会議を運営する意味はどこにあるのか常に考えさせられた。そして、無事本会議の全日程を終えた今、二つの視点を得た気がする。

まずは自分を客観視する視点である。この長い準備期間、実行委員の中で幾度となく意見の対立が起きた。一人ひとりが心から第63回会議を良いものにしたいと思うが故の衝突である。しかし、このような状況の中でふと自分を客観的に見つめた時、今までになくはっきりと己の弱みを見極めることができた。実行委員長としての1年が自分を一回り成長させてくれた。今後も多くの困難はあるだろうが、この一年で学んだ「辛抱強く、冷静に対応する」ということを常日頃から意識できる人間でありたい。

次に常に感謝の気持ちを持ち活動する視点である。77年にわたり伝統が継承されることは大変難しく、大勢の方々のサポートがあって初めて実現するというのをこの一年を通じて、実感した。3月に起きた大震災により会議の存続が危ぶまれる中、今年も開催にこぎつけることができたのは、大勢の方々が日米学生会議を信じ、ご支援して下さったからに他ならない。企業や財団の方々、行政の方々、日米学生会議の先輩方と国際教育振興会の方々など、大勢の皆様のお力添えがあって初めて会議を開催できた。この場を借り、ご協力下さった皆様に心より感謝申し上げたい。

最後に、第63回日米学生会議は「知ることから創ることへ」という理念を掲げ運営された。この一カ月間は多くの意味で「知ること」は実現したが、「創ること」は今後追求すべき課題であろう。過去の参加者の間で Once a JASCer, Always a JASCer と言われるように、私たちは今後も JASCer であり続け、今年度の理念が指し示す「創ること」を未来のリーダーとして追求する責任がある。

未来は私たちにかかっている。頑張ろう。

多鹿 ちなみ

3週間と2日という期間を通して、第63回日米学生会議の参加者71名は“JASCer”となれたのだろうか。

5月の頭に行われた春合宿で36人の仲間と顔を合わせて以来、待ちに待っていた本会議が終了した。23日間、常に思考し、常に行動した。後悔することは何もない。しかしそれがつまり、過去の、そしてこれから開催されるどの会議にも劣らない最高のものであったとは限らない。本会議自体は終了した。23日間を通し私たちが“JASCer”となれたのであれば、勝負はこれからである。私たちの“JASCer”としての人生は始まったばかりである。

本会議では23日間で最大限に使った。チャンスは十分すぎるほど与えられた。

各サイトでのフォーラム、講演会、フィールドトリップでは、国家単位の視点からコミュニティーの視点まで、幅広いレベルでの世界を知ることができた。

会議のひとつの大きな軸である分科会活動では、ディスカッションを行う際に生じる優先順位の違いや、英語での討論という部分で得るものは多かった。分科会という、本気で“議論”をし続けることが出来る環境は、他で経験することは出来ないだろう。

また、分単位での行動が必要とされる中、参加者との交流も重要なイベントであった。自己管理

とタイムマネジメントが必要とされた本会議中、見ず知らずの71名の学生と共同生活を送る上で、個々の価値観や優先順位の違いなどをありのまま実感することが出来た。

これらを生かすかどうかは、今後参加者ひとりひとりの行動に委ねられている。

第63回日米学生会議自体は、私にとって悔いのないものだった。しかし周囲から見た際、果たしてそれがどのような23日間であったのかが分かるのは、10年、20年、50年後だろう。これから先、どのJASCerに会っても胸を張ってられるように、これからはOGとしても、責任を持ち精進する次第である。

館林 真一

第63回日米学生会議が終了してから早一週間。すでに沢山の友人から「どうだった?」と聞かれるが、いつもその質問に単純に答えられず困っている自分がある。言葉で表すのがこんなにも難しい、最高に充実した夏は今までになかった。振り返れば、スタートラインだった春合宿はもうすでに4ヶ月前のこと。「科学・技術の発展と倫理の再考」という、今まで考えもしなかったトピックを扱う分科会に所属した私は、不安と期待で一杯だった。春合宿での最初のミーティングからすでに意見が真っ向から分かれるなど、衝突することも多々あり、分科会の方向性もなかなか定まらなかった時には、ゴールの見えない霧の中をただ走っているかのような感覚を覚えた。そんな日々も今思うと懐かしい。

いよいよ本会議でアメリカ側参加者と対面した時は、興奮というよりは「やっと会えた。」という安堵感の方がむしろ強かった。日米合わせて71人の学生。こんなにも大人数ではあったが、すぐに打ち解けることができ、参加者一人ひとりの個性がとても強く、みんなが自分ない何かを持っていた。自分の弱さをさらけ出し、他人の良さを素直に認め合い、いつも本音で正直にぶつかってきてくれる仲間ばかりだった。そんな彼ら

と過ごした1カ月はとにかく刺激的で、自分自身を見つめ直す貴重なチャンスも与えてくれた。特に忘れられないのは、毎晩の『特別分科会』。みんなでリラックスしてそれぞれの夢をシェアし「We'll make a difference!」と叫び、将来について声高に熱く語るのが楽しくてたまらなかった。

日米学生会議は私の人生の芯として残り、私の糧となっていこう。これからは、第63回日米学生会議のテーマの最後の締めである「未来を共に創ること」を日米学生会議の皆で成し遂げたい! 日米学生会議の醍醐味。それは価値ある「新しい体験」と「人脈という宝」、そして何より、自分の将来への「新たな可能性」を見いだせる場であることだ。

棚田 壮太

私がJASCに応募した理由は、『夢を語る熱い学生と出会いたい』と考えた為である。「自分はいったい、何をしたいのか?」半年に及んだ就職活動の最中にも、ずっと考え続けたこの間に、社会人となる前の最後の機会を活かし、改めて熱い学生達と共に迫ってみたいと考えた為だ。

私のこの狙いは、なんと5月の春合宿段階で、既に達成されてしまった。そこには、36のまったく違う個性が集い、自分の考えをしっかりと持ち、表現していたからだ。この段階で、意欲的に成長する個々の姿に感銘を受けた。更に7月29日にはアメデリと出会い、第63回JASCは71の個性という、まさに無限の可能性を秘めた集まりとなった。

新潟、京都/滋賀、沖縄、東京と、景色も環境も変化する日程の下で、あっという間の1ヶ月ではあったが、私たちは時間の許す限り議論を尽くし、そしてお互いを理解しようと毎晩深夜まで熱く語り合った。間違いなくこの個性的な集団は一丸となり、大きな成長を遂げていると感じた。一方で、自分自身はどれほど成長し、JASCを通じて何を得たのか。この問いへの答えには時間が掛かりそうである。

JASCを終え改めて思う事は、ここからが一番大切だということである。JASCで語られた議論にどんな価値があったのか。学生最後の夏を過ごす場としてJASCを選んだことが正しかったのか。JASCが自分の人生において大きな転機となったか。これらの問いへの答えのすべては、今後の自分が決めるという事だ。JASCを通して感じた最高の瞬間を胸に秘め、新たな一步を踏み出していきたいと思う。それが、JASCという素晴らしい環境を提供して下さった、多くの支援者の方々、1年間奔走し笑顔で迎えてくれたECの皆、そして尊敬する70名の仲間達への真の恩返しと考えている。

富沢 瑠美

最寄り駅の改札を抜けると、この4カ月が一気にフラッシュバックした。8月21日の夜、日米学生会議の全プログラムを終え、“日常”に戻ってきた瞬間である。名前のつけようのない感情の高ぶりを覚え、倒れそうになった。

振り返れば去年11月、私のストーリーは幕を開ける。授業の空きコマにあった説明会、大学のテストと被ってドタバタした1次審査の資料作り、色々とアウェーな気分になった2次面接、でも謎の自信に満たされて四ツ谷を出たこと。気付いたら春合宿に参加していた。ここで大ショックが起きる。ズバリ「英語」!2日目の英語ワークショップでのディベートでは、トピックである“U.S. Base in Okinawa”をアメリカ野球の話と勘違いして考え始めたほど、気が動転していた。今だから笑えるが、当時は本気で帰りたくなかった。不安が9割のスタートだった。

そこからは、考えられないほどのスピードで日々は過ぎていった。分科会は感激の嵐。今まで完全に独学で進めてきたメディアについての研究を、初めてアウトプットができたこと。同じような本を読み、問題意識を持ち、自分なりの解決策を考えている同年代に出会えたこと。しかしここでも英語はネックだった。それはあくまで一つの

ツールでしかなく、肝心なのは私自身のアイデアや伝えたい気持ちであることは分かっていたが、それでも他言語を用いて細かい描写、ニュアンスを伝えるのは困難極まりなかった。しかし同時にその苦難は、言語の壁を越えた人のつながり、心強い仲間がいることを心の底から感じさせたのも確かである。よく笑って、よく泣いた。毎日何かしらの葛藤があった。人間の持つあらゆる感情を一気に味わった日々。隣にはいつも誰かがいた。だから倒れなかった。だから思いっきり挑戦できた。それが日米学生会議。

支えてくださっている全ての方への感謝は尽きない。そしていとおしくてたまらない仲間たちへ。ありがとう。一生よろしく。うーん、感無量!

中川 渉

JASCの終了から早2週間が経ち、日記を見返してみると自分が如何に自問自答していたかがよく分かる。そして、振り返ってみると今回の会議のテーマ「対話と挑戦からともに描く未来」は同時に私個人のテーマでもあったように感じる。

「私にとってJASCとは何だったのか」成績を付け、答えを出すことはまだ出来ない。ただこの4ヶ月間が剥き出しの自身と直に対峙せざるを得ない期間であったことは間違いない。それは多くの尊敬する参加者に囲まれ、対話を繰り返す中で溜まっていく自身への疑念であり、一人の友が何気なく発した言葉が一瞬にして打ち砕く私の苦悩であった。高校時代から自立を是とし何事も一人で解決しようとしてきた私にとって、他者との対話・比較によって初めて気づく新たな自身の側面は新鮮そのものであった。自分の壁を乗り越えたとはまだ思わない。JASCという特殊な環境・時間が課題を解決し、また新たな環境では同じ壁にぶつかるかもしれない。しかし、この経験が私の成長へつなげるマイルストーンであることは間違いない。

私は実行委員選挙への立候補を最後まで迷った。結局、私はこの居心地のよい気心知れた仲間

たちから離れ、全く新しい環境で自分にチャレンジすることが私にとって重要であるという結論に至った。そこで初めてこの4ヶ月間に適正な評価が自分の中に持てるに違いない。新たな環境で直面する様々な壁にも、JASCの参加者としての経験、得た仲間たちが私の支えになっていくことだろう。

本会議を終えた今、「対話と挑戦から共に描く未来」というテーマは今後も私の課題になっていくと感じる。このような素晴らしい場に参加する機会を私に与え、会議を支えて下さった全ての方々から心から感謝の意を示したい。たとえ参加者それぞれの道は異なっていようと、それらの道が交わったJASCでの経験は各々の未来にとって絶大な原動力となることだろう。

中澤 耕己

前年度会議の終盤にサンフランシスコで行われた選挙を経て、第63回日米学生会議実行委員となってから、ちょうど1年が経ったことになる。実行委員として日米学生会議に1年間関わることは、大学4年になる自分にとって生易しいものではなかった。しかし、多くのものを背負った分だけ、自分の中の熱意と意地は強かった。挫ける理由がたくさん転がっていたからこそ、何が何でも完遂しようと思っていた。

そして1年が経ち、膨大な準備の時間に比べれば、瞬く間に本会議は終了した。第63回日米学生会議は成功したのだろうか。参加者は、自分は、変わることができたのだろうか。本会議終盤で自問し続けた問いである。その解は誰かが出してくれるわけではない。噛り付くようにして本会議を走り抜けた後の虚脱感があるだけである。

本会議前、大学の友人に「なぜそこまで没頭できるのか?」と聞かれた。そんなことは考えたこともなかった。ただ、強い個性と実力を併せ持った学生が日米両国から集い、切磋琢磨する環境が心地よかったし、尊敬している仲間たちだからこそ、誰にも負けたくなかった。むしろ、立ち止ま

る理由がなかった。しかし、そうやって「ライバル」を横目に走り続ける中で、結局気付かされるのは自分の弱点ばかりであった。多くの人との関わりの中で最終的に見えてきたのは、自分に出来ない多くのことと、わずかながらの出来ること。常に自分の弱さを映してくれる素晴らしい仲間感謝している。

この「参加者の声」を読めばわかるように、この夏が自分の中で何一つ整理されていない。しかし、無理やり整理する必要はないとも感じる。これから先、この仲間と世界のどこかで再会する時に、絶対に負けていたくないという気持ちを持ち続けさえすれば。

最後になりますが、第63回日米学生会議開催に際して、本当に多くの方々にお力添えいただきました。この場を借りて、ご支援ご協力いただきました皆様心より御礼申し上げます。

宮内 雄飛

日米学生会議に応募したとき、強い志望動機を持っていなかった。高校生の頃から、漠然と大学生になれば参加するものだと思っていた。なんとなく面接を受け、気がついたら合格通知を手にしていて。合格通知を受け取ったときも嬉しくて号泣することはなかった。しかし、春合宿で多様なバックグラウンドを持つ刺激的な仲間や、各分野の第一線でご活躍されているアラムナイの方々にお会いしたことで、に対する考え方は一変した。事前活動や本会議を通じて多くの方々とは様々なお話をする機会をいただき、ありきたりの表現ではあるが、自らの視野をさらに広めることが出来たと実感する。

私の所属した分科会「文化と環境問題」では、アメリカでもとりわけ環境問題への意識が高い学生が集まったこともあり、良い意味で期待を裏切られる事が多々あった。しかし、分科会のアメリカ人がアメリカにおける大多数の意見でないことを考慮すれば、教育がいかに重要か再認識させられた。

「京都・滋賀」サイトでは、大変多くの方にお世話になりつつ、自らのアイデアを本会議のプログラムに組み込んでいただけた。企業訪問先の決定やゲストスピーカーの招聘に関しては、なにが日米の学生にとって最適か、非常に時間をかけて熟考したので、各プログラム後の参加者の声を聞いて非常に満足した。

日米学生会議の魅力は、ヨコだけではなくタテのつながりがあることだ。アラムナイに誘われ、昨年のファイナルフォーラムでの内容がベースとなった一つのプロジェクトに携わることができたが、これもひとえに日米学生会議に参加できたおかげです。学生会議であるがゆえの限界を感じることもありましたが、それ以上に多くのことをこの日米学生会議から学びとることができました。

最後になりましたが、未曾有の震災後という困難な状況にもかかわらず、本会議の開催にあたりご尽力をいただきました関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

山田 晃永

いつの間にか、長い実行委員生活も終わりを迎えようとしています。思い出はここに書き連ねるのではなく胸の奥にしまいこみ、代わりにお世話になった方々へお礼を述べさせていただきます。

まず、沖縄サポート委員会への感謝の気持ちは言葉では言い表せません。錚々たるメンバーにお集まりいただき、私のような者が一緒に活動させていただくだけでも恐れ多く、皆様のご尽力で事業の規模が大きくなるにつれ、期待に押し潰されそうになりました。しかし、お忙しい中、隔週でお集まりくださり、私どもの夢を形にするために真剣に議論してくださる皆様の姿を見るたびに、最後まで諦めずに頑張ろうと気持ちを新たにしておりました。体力も気力も足りず苦しかった時期は、インターネット電話を通して溢れ出る皆様の温かさに、何度も救われました。

また、連日通い詰めた財団法人国際教育振興会の皆様には大変お世話になりました。特に、何度

も丁寧に文章を添削してくださった伊部さん、私の長話にお付き合いくださった稲田さん、どんな雑務も笑顔で引き受けてくださった後藤さん、本当にありがとうございました。

思い返せば、あらゆる面で悩みの尽きない1年でした。強がりの泣き虫という扱いにくい私を支えてくれる友人の大切さに気付かされました。また、常に側にいてくれた実行委員の井上聡美と下地邦拓には心から感謝しています。下地とは度々衝突もしたけれど、名桜大学の大城美樹雄先生が「下地君と山田さんのペアが沖縄担当で本当に良かった」とおっしゃる通り、最高のパートナーでした。

上記の他にも、実に多くの皆様のご支援ご協力のおかげで会議を終えることができました。実行委員としての任務を終え、さらなる挑戦をすべく、来年1月から渡英いたします。お世話になった皆様に一回り大きく成長した姿でお会いできるよう、異国の地で邁進いたします。拙い言葉ですが、お礼のご挨拶とさせていただきます。

八木澤 龍大

5月から8月までの4ヶ月間の日米学生会議のプログラムの中で、私が強く感じたことは以下の2点です。

1点目は、歴史や伝統を伝えることです。以前は戦争をどこか遠いことのように感じていましたが、広島研修と沖縄サイトで現地の人々や実際の資料に触れ、平和な社会を作るにはどうすればいいか考えるようになりました。書物を読むだけでなく、現地に直接赴くことで、深い学びを得ることが出来ると感じました。また、京都サイトでは、香の老舗、松栄堂の社長から、失われつつある伝統を後世に伝えるには、「伝統を伝えよう」と力むより、自分が伝統を楽しみそれを効果的に表現することが重要だと学びました。また琵琶湖の沖縄では後継者不足が問題となっていますが、インターネットで広く体験やボランティアなどを募れば、世界から沖縄の生活に興味を持つ人々が集ま

り、彼らこそが「後継者」となるのではないかと思います。グローバル化社会の現在、後継者は世界のどこかにいるという姿勢も持つことができるのではないのでしょうか。

2点目は、様々な視点から物事を見ることです。原発問題や基地問題では、推進する人と反対する人がおり、それぞれの正義を目の当たりにしました。また、それぞれの問題で政府と地方、さらに日米間での問題意識のズレに驚かされました。問題を解決する上で致命的なこのズレを修正し、同じ土俵に立つために、互いの思いを現地で体験し、互いの正義を理性的に理解し合わなくてはならないと思いました。原発や基地の政策を扱う人々は、実際に現地や相手国に赴く必要があります。「大局を見るために局地的な視点は不要」という考えは言い訳です。私は、局地的な視点を理解した上で大局的な政策を実行することは不可能ではないと信じています。

以上の2点を踏まえた上で、直接現地学習の必要性を強く感じ、私は、将来的に学生達向けに直接現地に赴く学びの場を提供する仕事をしたいと思うようになりました。

山下 祐里奈

日米学生会議を終えて既に一週間近くが経つが、未だにプログラムが終了してしまったことを信じられない、信じたくないという思いが私の中に強くある。日米各所から、71人の学生が集まり、共同生活をしながら様々な学習を1カ月に渡って行うという非日常の中、決して楽しいことばかりではなかった。悔し涙を流したり、イライラしたり、沢山の悩みを抱え、自分の弱さや欠点と向き合った。様々な困難を前に、逃げずに戦えたのは、周りに素晴らしい仲間達がいたからである。悩みを聞いてアドバイスしてくれるのは勿論、彼ら自身が真剣に自分に向き合い、常に向上心を持ち努力する姿を、身を持って私に示してくれた。彼らのひたむきな姿に刺激され、「負けたくない、自分にもできる」と信じて、自分の悩みにぶつか

ることができた。

本会議で最も印象に残っているのは、分科会活動である。ファイナルフォーラムでの発表ばかりを意識するのではなく、お互いの意見を出しつくり、解決策や妥協点を自分たちで作り出すという共通の目標を定め、全員が納得のいくまで活発に議論することができた。はじめはなかなか英語に自信が持てず、積極的な議論への参加ができなかった。しかし、分科会メンバーが互いに気を遣いあい、意見を尊重しあうことで、英語のハンデを考えなくなり、積極的に発言出来るようになった。分科会のメンバー全員が成長し、互いを高めあいながら非常に有意義な議論が出来たと思う。

五月の春合宿から本会議終了までの4ヵ月間を通し、様々な人に出会い、様々なことを学んだが、これらは日米学生会議だからこそ得られた大変貴重な経験である。私にこのようなチャンスを与えてくれた全ての人々に心から感謝している。同時に、次の世代にも、このような価値ある日米学生会議という舞台を繋げて行く責任も感じている。これからは、参加者としてではなくなるが、いつまでも日米学生会議に関わり、貢献していきたい。

吉本 理沙

私は6年間ある大学生活の1年目は、医学だけにとどまらず様々な学問を専攻する学生、そして名古屋だけにとどまらず、日米両国の各地から集まる学生を作りたいという思いで、日米学生会議に参加しました。

日米学生会議を通して、一ヶ月をともに過ごし、議論をし、夢を語ったりした仲間を70人得られました。それぞれの進む方向は違いますが、一人ひとりがそれぞれの夢に向かって努力しており、非常に刺激を受けました。それにより自分の将来の夢や目標に対しモチベーションが高められると同時に、自分の足りないところ、良いところ、やりたいことなどが明確になり、自分を見直すことができました。

さらに、当初の目標を達成しただけでなく、多くのことを日米学生会議から学ぶことができました。まず分科会では、今まで知識でしか捉えられていなかった「差別」が、事前学習やアメデリを交えた議論の中で、少しずつ現実味を帯び、日常的なものであると実感し、差別について考えさせられる機会となりました。そして、4つのサイトで原発、山古志村、米軍基地、ガマなどにおける講義や見学、そして学生同士の討論を通して、日米問題だけに収まらない幅広い問題意識を持つこ

とことができました。

以上のように、日米学生会議では、一ヶ月という期間で様々なことを考えさせられる大変貴重な機会が与えられました。これからの課題はそれをどのように活かしていくのかであると感じています。今、日米学生会議を振り返ってみると「知ることから創ることへ～対話と挑戦から共に描く未来～」という第63回日米学生会議のテーマの難しさを改めて実感するとともに、その意味が分かったような気がします。

